

工場建築に特化した企画提案型の総合建築会社。“ニッポンの工場を強くする。”をミッションに、日本のモノづくりを支えていく

平成10年に埼玉県越谷市で産声を上げたヨシザワ建築構造設計は、国内では数少ない構造設計を専門とする総合建築会社で、工場建設に特化し、企画提案から設計（意匠・構造・設備）、施工管理までをワンストップで行う。工場の稼働を止めずに建て替えや増改築、耐震改修等の工事を行う工場建築のスペシャリストとして、多くの製造業から厚い信頼を得ている同社。“ニッポンの工場を強くする。”をミッションに日本のモノづくりを支えていく。



代表取締役 米田 圭介氏

- 代表者 代表取締役 米田 圭介
- 設立 平成10年9月
- 資本金 6,128万円
- 従業員数 61名（グループ全体 128名）
- 事業内容 工場・倉庫の建て替え・増改築・改修・補強・新築等に関する企画・設計・施工管理業務
- 所在地 〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-13-6 浜町ビル3F
TEL 03-5641-4430 FAX 03-5641-4431

●URL <https://yoshizawa-arch.co.jp>



建築物の設計は大きく分けて建物のデザインや間取りを設計する「意匠設計」、電気や上下水道などの設計を行う「設備設計」、そして建物の基礎や柱、梁などの骨組みを設計する「構造設計」がある。なかでも地盤の特性を把握して、建物が地震や強風等の災害に耐えられるよう分析と計算を行い設計する構造設計は、建物が長期にわたって安全に機能し続けるために重要な役割を担う。

株式会社ヨシザワ建築構造設計は、この構造設計を軸にさまざまな業種の工場や倉庫の設計・建築を行う総合建築会社だ。工場の稼働を止めずに工事を行うノウハウを数多く持つことで定評があり、これまでに大小約3,000棟を手がけた実績を持つ。

「構造設計で必要な資格となる構造設計一級建築士は、一級建築士の上位資格で取得は難関です。一級建築士全体の割合では大半が意匠設計で、構造設計と設備設計は少ない。当社グループには構造設計や設備設計の資格を持つ社員が在籍しているので、意匠・構造・設備すべての設計を行うことができます」（米田圭介社長）

ゼネコンの依頼で構造計算や構造設計だけを請け

負う構造設計事務所が多い中、同社は元請けとして営業・企画から意匠・構造・設備の設計、工事管理までを一気通貫で行う。この総合力が同社の競争力だ。

→ 阪神・淡路大震災の復興支援が転機に

昭和45（1970）年、現会長の父・吉澤浩二氏が草加市に建築設計事務所を創業し、4年後に株式会社ヨシザワ建築設計事務所を設立する。当時はビルやホテルなどさまざまな建物の建設を行っていた。

平成7（1995）年から約2年間、吉澤宏泰氏（現会長）と父の吉澤浩二氏が阪神・淡路大震災の復興支援に赴く。そこで被災した工場など建物の補修や補強に携わったことが大きな転機となる。吉澤宏泰氏はそこで得たノウハウを日本のモノづくりを支える中堅・中小企業の工場に生かせないかと考え、平成10年、越谷市で工場に特化した構造設計と工事を行うヨシザワ建築構造設計を起業した。

その後、平成28年にグループ会社でシステム建築（部材を標準化し、建築プロセスをシステム化した建築法）を主体とするガンコ建築株式会社を設立。令和元

(2019)年にはBIM(コンピューター上に作成した立体モデル)での作図の拠点としてベトナムのダナンにYDA VIETNAM CO.,LTD、西日本エリアを商圏とするヨシザワ想造建築株式会社を設立。令和4年にデザインと設備設計を手がける株式会社ヨシザワデザイン設備設計を設立するなど、業務の幅を広げていった。

同社は平成10年の創業時から「ニッポンの工場を強くする。」をミッションに掲げている。その思いの下、国内でも数少ない工場・倉庫建築専門企業として、耐震性・耐久性を保証する確かな構造設計とそれに基づいた安全な監理・施工を行ってきた。構造設計を専門としながら、ワンストップで工事まで行う同社のような企業は希少だという。

「当社のターゲットは中堅・中小企業です。大手ゼネコンさんは、それより大規模な工事が主体なので競合にはならない。また、当社は構造設計を行い、工場の稼働を止めずに工事を行うような難工事を得意とするので、更地に新築工場を建てるといった案件を狙う同業他社とも戦う土俵が別になる。お客さまからも工場の稼働を止めないということで当社に声がかかりますから、競合は少ないと思います」

こうして同社は、自社の強みが発揮できる市場にフォーカスして差別化できるポイントを強化し、自社の立ち位置を確かなものにしていった。

➔ ニーズに応じてオーダーメイドで工事を行う

工場の稼働を止めずに工事を行う同社の工法は、大きく三つある。一つ目の「カバービルド工法」は、緻密な構造設計と工事施工計画を組み合わせた同社独自のもので、既存工場の外側を覆うように新規工場の建屋をつくり、その中にある既存建物を順次解体していく工法だ。二つ目の「セパレート工法」は工期を分割し、操業を維持しながら工期ごとに建て替えを行う工法で、三つ目の「コネクション工法」は、離れて建つ2棟以上の建物の間に新たに建物を建てて建物同士をつなぎ一体化させる工法である。

「こうした工法を組み合わせながら、お客さまの敷地状況やニーズに応じてオーダーメイドで企画提案します。緻密に構造設計を行い、どのような工程で工事を進めるかプロセスを構築していくのです。時間も労力もかかりますが、当社は長年それを行ってきましたから十分なノウハウの蓄積があります」

ほかにも耐震強度を維持しながら既存の工場を解体することなく建物の屋根をかさ上げする「リフトアップ工法」や、綿密な構造計画を立て既存の^{ひきし}庇を大幅に拡



本社社屋



社屋内観



カバービルド工法施工時



カバービルド工法完成

張し、中柱のないアーチ型の巨大屋根を実現する「ビッグルーフ工法」等、顧客のニーズに応じてきめ細やかに施工プロセスを構築していく。同社が手がける工事は新築、建て替え、改築、改修、耐震補強、増築等幅広い。リピーターの顧客が多く、外観のデザイン性など意匠設計においても高評価を博している。

➔ ベトナムなど海外の監理実績を持つ

米田社長は平成15年に同社に入社。工事監督、営業を歴任し、令和5年に2代目社長に就任する。これまでに、ヨシザワ想造建築の前身となる京都支店やガン

コ建築、ベトナムの現地法人等、各グループ会社の立ち上げに携わってきた。

海外進出の契機となったのは、同社が日本で建て替え工事を行った自動車部品会社からの依頼で、ベトナム工場増築にあたり構造躯体の工事監理を任されたことだ。それ以降、赤道ギニアでミネラルウォーター製造工場やネパールの地震で損壊した学校の建て直し工事の設計・監理を行うなど、海外の実績を積み上げていった。

「現在ベトナムのグループ会社では、主に当社からア

「秋田で、祖父の米作り農業を受け継ぎたい」と辞職を切り出した社員に米田社長は、農繁期は秋田で農業を行い農閑期には東京で仕事を行うという2拠点生活を提案した。また、家業を手伝ってドローン事業を副業で行う社員を応援するなど、同社以外に活躍の場を求める社員に挑戦の場を与え、それを支援している。

「たとえ社員が転職や副業をしても、ヨシザワ建築構造設計とつながっていればいいと思っています。関係性がゼロになるのはもったいない。ドローンのように建物の点検業務において、当社の事業にシナジーを発揮できることもあるし、何より自ら動いて挑戦し、解決策を見いだそうとする人を社内で増やしていきたいのです」

今年6月には、米田社長はじめ同社の社員が、上記社員が耕す秋田の水田を訪れ田植え体験を実施。初めての体験は大きな刺激になったという。9月には稲刈り体験も行い、収穫した新米を顧客や取引先、従業員に配布した。同社が提案したこの2拠点生活の実践は地元・秋田で話題を集め、新たな働き方として地元新聞にも取り上げられた。

→ 工場を強くし日本のモノづくりを強くする

今後は、現在の関東・関西が主流の商圈を広げ、“ニッポンの工場を強くする。”というミッションの実現に取り組んでいきたいと語る米田社長。

「ドローンを副業とする社員の実家が静岡で、その社員の営業で静岡の工事の受注につながった例があります。この先営業拠点を増やして規模の拡大を目指すのではなく、新たな働き方をする社員の活躍によってテリトリーを広げていけたら、と考えています」

同社は創業以来、建物を大地震や災害から守ることで顧客企業の社員や生産設備を守ってきた。それは顧客にとって快適な職場環境をもたらし、さらなる生産性の向上につながるのだと考えている。

“工場ひとすじ”で社歴を重ねてきた同社は日本のモノづくりを支える工場を強くし、そこで働くモノづくり人材を強くすることで、日本が強くなることに貢献していく。



施工実例(左)外観、(右)内観

(左、右上)秋田での田植えの様子、(右下)稲刈りの様子

ウトソーシングする“BIM”の設計を手がけています。アジアは地震が多いので、今後は、海外に進出する“ニッポンの工場を強くする。”というミッションにも貢献していきたいです」

→ 社員の多様な働き方を応援する社風

同社の社員の平均年齢は35歳と若く、社員の満足度を高める福利厚生も数多く用意されている。家族にも支給される帰省（親孝行）手当、引っ越し手当などの制度が好評だ。そして何より特徴的なのが、社員の多様な働き方を許容する会社の姿勢である。